検出した遺構は全体で、掘立柱建物跡約200棟、竪穴建物跡103基、石敷き礎石建物跡１棟、井戸３基、土壙約250基、墓約110基、櫓、柵、塀、空壕、橋の跡などである。

中世陶磁器、金属製品、木製品など多量の出土遺物からは、武器や武具で身を固め、茶道をたしなむ武者、狩猟・漁撈具を携え山野河海を駆ける狩人、住家や厩の普請につとめる職人、フイゴの羽口や鉄滓などは鍛冶職人、銅の鋳造跡からは「鋳物師」と呼ばれる廻国の技術者集団が想起される。金剛盤や鉢杆（こしょ）などの宗教具からは北を目指した修験者たち、紅皿、毛抜き、簪、銅鏡などからは化粧に余念のない女性の姿も彷彿とされ、15㎝ほどの下駄を履いた子供の幼気な姿も想像できる。

梅毒に罹った人骨や、喫煙の風習を物語るキセルの出土は膨大な貿易陶磁の搬入とともに、この城館が海を通じ東アジアの世界と確実に繋がっていることを物語るものである。また、搦め手後方のゴミ捨て場に象徴されるように、ハレからケまで日々の生活全般にかかる日用品や食料残滓なども含め、あらゆる階層・年齢の占地居住を思わせるものがある。

とりわけ、アイヌ関連遺物や「アイヌ墓」からは近世アイヌに繋がる人々の存在を朧気ではあるが、輪郭を描くことができるようになった。「和人の館」と考えられてきた勝山館跡の様相は、当初とはだいぶ趣を異にするものとなった。

3　館跡の構造と性格

勝山館跡は北の中世を代表する山城として有名であるが、館跡主郭の地下に眠っている縄文前・中期の勝山館遺跡は気づかずに見過ごされている。

館跡の構造は、標高70～110m、幅100mほどの尾根を削平して切り開かれた主郭が中心を占地し、その前方大手には２条の空壕が屈曲して掘り切られ、第三平坦面の南側（搦め手）にも空壕が掘られている。主郭の周囲には柵列が巡り、東西の華の沢・寺の沢側の急斜面は直線的に切り落とされ、東側には華の沢倉庫群、西側には寺の沢用水施設が配されている。

北東に延びる尾根の尖端裾部は、旧名「無碇」と呼ばれる海浜地に接続する。その裾部の入り口付近には物見が据えられ、荒神堂付近まで急峻な尾根を掘り割った底道が続き、第一平坦面の虎口に取り付く。

第一平坦面から主郭正面を眺めると、大きな垂直の壁が高さ５m、東西約100mの幅で立ちはだかり威圧する。主郭の中央を通路が走り、通路の左右には住居や倉庫などが建ち、後方西側には館神が祀られ、前方西側は館主の空間が占地している。搦め手は３条の空壕が巡っているだけで、後方丘陵の稜線部へと続いており、搦め手の防御の手薄さは否めない。

標高も159mでさほど高くない夷王山が勝山館跡の後方に聳えているが、その山頂からは日本海に浮かぶ奥尻島や渡島大島なども遙かに遠望され、沖合を航行し、また大澗湾に接近する商船などの船影も容易に視界に入る。また、館跡の中央通路からは洲崎館跡を間近に見下ろすことができ、河口部における出船入船なども手に取るように掌握できる。まさに「海に顔を向けた館(46)」といえる。

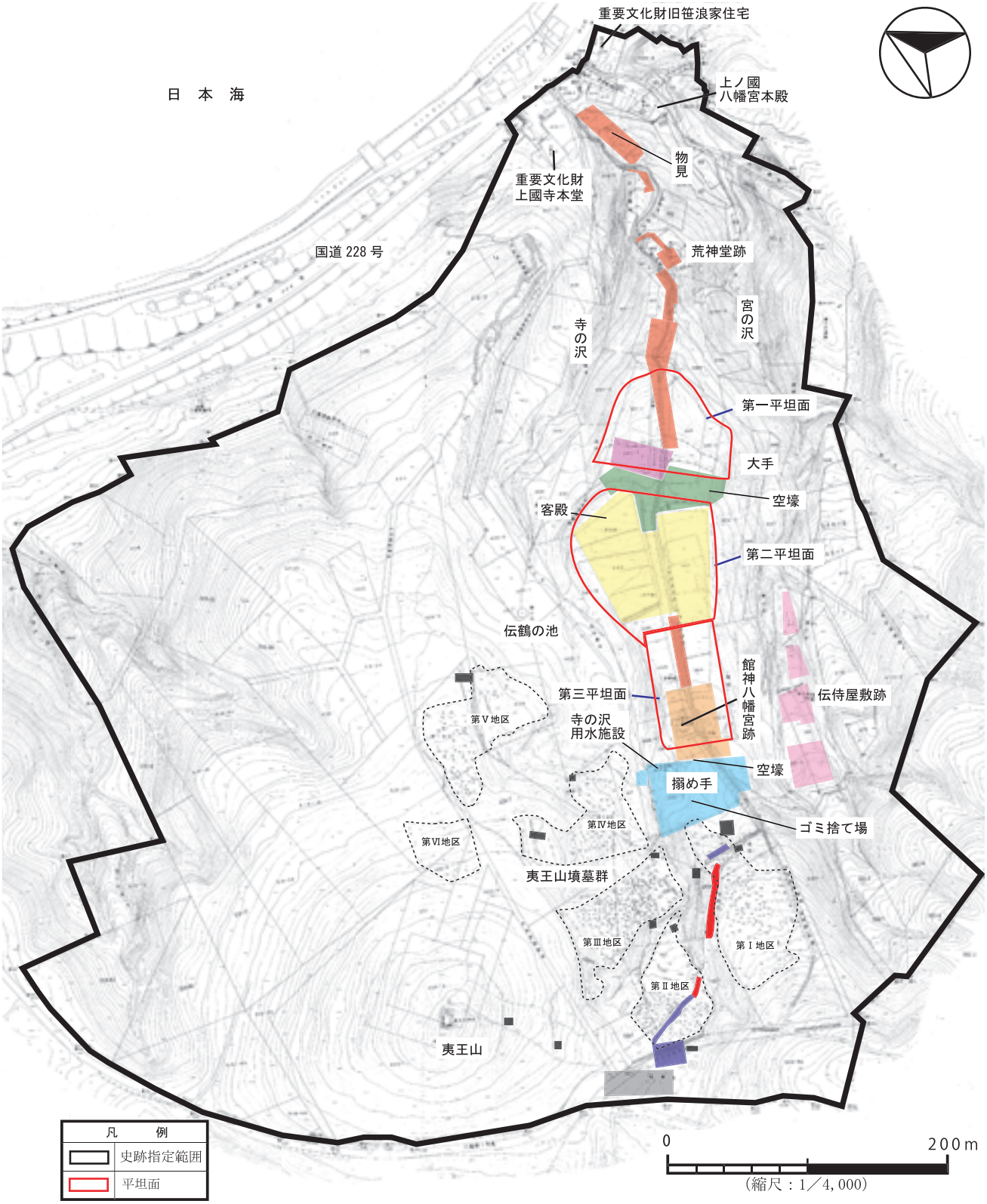
45,000点余を数える出土陶磁器でもっとも多いのが日用雑器の碗や皿で、青磁や白磁、染付の貿易陶磁と、瀬戸美濃大窯の国産品が多く、すり鉢では越前焼が圧倒的に多く、珠洲は若干である。これら陶磁器が示す館跡の存続年代は15世紀後半から16世紀末の間である。

この館の終末は、慶長期頃まで代々松前侯の先祖が居城していたとの天明８年(1788)の聞き書き（『東遊雑記』）などから、慶長初めとされてきたが、窯元生産地における編年との比較分析などからそれをほぼ裏付ける結論が導き出されている。

蠣崎宗家の松前大館進出後は、蠣崎家傍系の基廣や旧館主南條廣継夫妻の謀反、西部エゾの襲撃などが相次ぐが、遺構や遺物の状況は館の機能の衰退について否定的である。遺構と遺物の出土構成は館内での定住性を強く示し、都市的な性格が窺われるが、これらは蠣崎氏を中心に結集した非農業民の党的結合を強く示唆するものである。

30年を余る発掘調査で発見したアイヌ関連遺物は、中柄や骨鏃などの骨角器類、高台裏に刻印（シロシ）のある漆器や陶磁器、儀礼具のイクパスイ、狩猟具の丸木弓（ボンクー）などである。関連遺構は、館跡後方の墳墓群の中に「和人」の屈葬土葬墓を挟んで、ほぼ同時期の「アイヌ」墓２基を確認している。

城館の内部やその周辺には党的に結合した人々が居住しており、それらを統轄する領主と、「アイヌ」墓に埋葬された被葬者たち同族との間にきわめて強い親和力を想定し、また、被葬者たち同族（『正保日本図



区　分	年　度	調　査　内　容	面積（㎡）
	昭和 54 ～ 58 年度	搦め手地区調査	4,389
	昭和 56 ～ 58 年度	夷王山墳墓群調査	216
	昭和 57 ～ 58 年度	館神八幡宮跡及び周辺調査	2,520
	昭和 59 ～ 62 年度	伝侍屋敷跡調査	2,250
	昭和 62 ～平成 2 年度	大手地区調査	3,640
	平成元年度	夷王山墳墓群第Ⅱ地区調査	1,000

区　分	年　度	調　査　内　容	面積（㎡）
	平成 2 ～ 9 年度	主要平坦部（第二平坦面調査）	8,970
	平成 10 年度	第一平坦面南西部調査	800
	平成 11 ～ 12 年度	夷王山墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区調査	1,205
	平成 13・15・19・20 ～ 22 年度	旧道跡、荒神堂跡、物見跡調査	3,236
	平成 14 年～ 16 年度	夷王山墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区調査	1,090

第20図　史跡上之国館跡（勝山館跡）　調査区位置図

第21図　史跡上之国館跡（勝山館跡）　遺構位置図

表１　史跡等保存整備事業（発掘調査・整備）の内容

年度	事業名	総事業費（千円）	事業概要			掲載報告書（略称）
			種類	内容	面積	
S51	史跡上之国勝山館跡・花沢館跡保存管理計画策定事業	3,300	計画策定	航空測量・現況図化	239,443㎡	保存管理計画書
S52	史跡上之国勝山館跡・花沢館跡保存管理計画策定事業	2,506	計画策定	史跡上之国勝山館跡・花沢館跡保存管理管理計画策定	239,443㎡	保存管理計画書
S54	史跡勝山館跡環境整備事業	4,070	発掘調査 環境整備	搦手空壕跡 史跡案内板２基設置、史跡説明板１基設置、旧境界標（№.１～№.44）設置	400㎡	勝山館跡Ⅰ
S55	史跡勝山館跡環境整備事業	15,003	発掘調査 環境整備	搦手空壕跡付近 史跡勝山館跡標識１基設置	1,409㎡	勝山館跡Ⅱ
S56	史跡勝山館跡環境整備事業	20,100	発掘調査 環境整備	搦手地区土葬墓、ゴミ捨て場 搦手空壕芝張り	1,700㎡ 570㎡	勝山館跡Ⅲ
S57	史跡勝山館跡環境整備事業	20,013	発掘調査 環境整備	館跡八幡宮跡、ゴミ捨て場ほか 搦手空壕芝張り、空壕跡植栽表示	1,700㎡ 1,290㎡	勝山館跡Ⅳ
S58	史跡勝山館跡環境整備事業	20,000	発掘調査 環境整備	館跡八幡宮跡、ゴミ捨て場ほか 土葬墓 41 基・ゴミ捨て場平面表示	1,700㎡ 747㎡	勝山館跡Ⅴ
S59	史跡勝山館跡環境整備事業	20,000	発掘調査 環境整備	伝侍屋敷跡 環境整備実施設計１式	1,100㎡	勝山館跡Ⅵ
S60	史跡勝山館跡環境整備事業	20,001	発掘調査 環境整備	館神八幡宮跡付近 土塁・柵列復元、室町期創建・江戸期再建社跡平面表示、掘立柱建物２棟平面表示、石積み階段・古道跡整備、説明板１基設置、表示板５基設置、館神八幡宮跡周辺芝張り、境界標設置	480㎡ 741㎡	勝山館跡Ⅶ
S61	史跡勝山館跡環境整備事業	20,001	発掘調査 環境整備	伝侍屋敷跡土塁付近 寺の沢用水施設跡整備（木樋・井戸枠復元）、園路整備、説明板２基設置、表示板 12 基設置 伐採（仮整備）	470㎡ 489㎡ 25,000㎡	勝山館跡Ⅷ
S62	史跡勝山館跡環境整備事業	20,006	発掘調査 環境整備	伝侍屋敷跡、館跡平坦部北側大手付近 四阿１棟、説明板設置、搦手空壕跡植栽表示 伐採（仮整備）	820㎡ 450㎡ 20,000㎡	勝山館跡Ⅸ
S63	史跡勝山館跡環境整備事業	20,109	発掘調査 環境整備	館跡平坦部北側大手空壕付近 大手空壕跡芝張り、説明板１基設置 伐木、伐採（仮整備）	1,500㎡ 1,183㎡ 28,900㎡	勝山館跡Ⅹ
H元	史跡勝山館跡環境整備事業	20,160	発掘調査 環境整備	館跡平坦部北側大手空壕付近 大手空壕跡芝張り・掘立柱建物跡平面表示 伐木、伐採（仮整備）	1,400㎡ 1,203㎡ 26,000㎡	勝山館跡ⅩⅠ
H２	史跡勝山館跡環境整備事業	20,000	発掘調査 環境整備	館跡平坦部北側大手空壕付近 大手空壕跡芝張り 伐採（仮整備）	1,200㎡ 740㎡ 24,000㎡	勝山館跡ⅩⅡ
H３	史跡勝山館跡環境整備事業	20,071	発掘調査	第二平坦面北東部分	1,200㎡	勝山館跡ⅩⅢ
H４	史跡勝山館跡環境整備事業	20,011	発掘調査	第二平坦面北西部分	1,100㎡	勝山館跡ⅩⅣ
H５	史跡勝山館跡環境整備事業	20,001	発掘調査	第二平坦面北東中央部及び北西端部	1,100㎡	勝山館跡ⅩⅤ
H６	史跡勝山館跡環境整備事業	26,027	発掘調査	第二平坦面北東中央部	1,140㎡	勝山館跡ⅩⅥ
H７	史跡勝山館跡環境整備事業	26,358	発掘調査	第二平坦面北東中央部	1,230㎡	勝山館跡ⅩⅦ
H８	史跡勝山館跡環境整備事業	28,030	発掘調査	第二平坦面大手南西部	1,300㎡	勝山館跡ⅩⅧ
H９	史跡勝山館跡環境整備事業	32,014	発掘調査	第二平坦面大手北西中央部	1,300㎡	勝山館跡ⅩⅨ
H10	史跡勝山館跡環境整備事業	28,000	発掘調査	第一平坦面南半部西半及び北半部西半	800㎡	勝山館跡ⅩⅩ
H11	史跡勝山館跡環境整備事業	28,000	発掘調査 補充発掘調査	宮ノ沢川右岸地区 墳墓群第Ⅱ地区（散策路予定地）	350㎡ 250㎡	勝山館跡ⅩⅩⅠ
H12	史跡等活用特別事業（史跡勝山館跡）	40,259	発掘調査 補充発掘調査	宮ノ沢川右・左岸地区 墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区（散策路予定地）	504㎡ 955㎡	勝山館跡ⅩⅩⅡ
			環境整備	散策路整備	59㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H13	史跡等活用特別事業（史跡勝山館跡）	122,157	補充発掘調査	館跡中央通路、側溝跡	552㎡	勝山館跡ⅩⅩⅢ
			環境整備	散策路整備、搦手空壕木橋復元、米・文庫蔵復元	319㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H14	史跡等活用特別事業（史跡勝山館跡）	153,026	補充発掘調査	ガイダンス施設建設予定地（墳墓群第Ⅱ地区）	391㎡	勝山館跡ⅩⅩⅣ
			環境整備	主郭保存整備（大手木橋復元、丸太柵列復元ほか）、米・文庫蔵復元	3,800㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H15	史跡等総合整備活用推進事業（史跡勝山館跡）	273,416	補充発掘調査	ガイダンス施設建設予定地（墳墓群第Ⅱ地区）、館跡中央通路	769㎡	勝山館跡ⅩⅩⅤ
			環境整備	主郭保存整備（丸太柵列復元、遺構平面表示）、ガイダンス施設建設、館跡全体模型製作、墳墓遺構レプリカ復元	3,800㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H16	史跡等総合整備活用推進事業（史跡勝山館跡）	69,773	補充発掘調査	勝山館跡 28J・Ｋ地区（墳墓群第Ⅰ地区ほか）	200㎡	勝山館跡ⅩⅩⅥ
			環境整備	主郭保存整備（遺構平面表示７ヶ所、丸太柵列復元）、映像展示システム・映像ソフト制作	3,800㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ

年度	事業名	総事業費（千円）	事業概要			掲載報告書（略称）
			種類	内容	面積	
H17	史跡等総合整備活用推進事業（史跡勝山館跡）	59,484	環境整備	主郭保存整備（平面表示 9 ヶ所、遺構説明板 7 ヶ所、中央通路跡整備 40 m）	628㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H18	史跡等登録記念物保存修理事業（史跡上之國館跡）	22,422	環境整備	主郭保存整備（遺構配置説明板 2 基、遺構説明板 2 基）	23㎡	勝山館跡整備事業報告書Ⅰ・Ⅱ
H19	史跡等登録記念物保存修理事業（史跡上之國館跡）	20,215	発掘調査	第一平坦面（旧道跡）	600㎡	上之国館跡Ⅰ
			環境整備	主郭保存整備（誘導案内板 5 基、櫓門跡平面表示 1 式）		上之国館跡Ⅳ
H20	史跡等登録記念物・歴史の道事業（史跡上之國館跡）	28,582	発掘調査	荒神堂跡・旧道跡	600㎡	上之国館跡Ⅱ
			環境整備	エントランス小広場整備 65㎡、法面保護 100㎡	165㎡	上之国館跡Ⅳ
H21	史跡等登録記念物・歴史の道事業（史跡上之國館跡）	22,791	発掘調査	荒神堂跡・旧道跡	700㎡	上之国館跡Ⅲ
			環境整備	代参道路手すり設置 34 m、指定標柱 1 基設置		上之国館跡Ⅳ
H22	史跡等登録記念物・歴史の道事業（史跡上之國館跡）	11,047	発掘調査 環境整備	旧道跡・物見跡 搦手柵列整備 29.7 m、指定標柱 2 基・総合案内板 1 基設置	700㎡	上之国館跡Ⅳ
合計		1,276,953		調査面積 整備面積	29,620㎡ 11,824㎡	

表２　埋蔵文化財保存事業（発掘調査）の内容

年度	事業名	総事業費（千円）	遺跡等の名称	調査概要				掲載報告書（略称）
				原因	種類	内容	面積	
S56	夷王山墳墓群詳細分布調査事業	16,000	夷王山墳墓群	学術研究	確認調査	伐開・草刈り、墳丘確認調査（第Ⅰ～第Ⅵ地区）	36,000㎡	夷王山墳墓群
S57	夷王山墳墓群詳細分布調査事業	16,369	夷王山墳墓群	学術研究	確認調査	墳墓確認調査 9 基	99㎡	夷王山墳墓群
S58	夷王山墳墓群詳細分布調査事業	5,000	夷王山墳墓群	学術研究	確認調査	旧道跡調査、墳墓標識杭設置 622 基	117㎡	夷王山墳墓群
H 元	夷王山墳墓群詳細分布調査事業	2,858	史跡勝山館跡	工事	本発掘	夷王山麓東側駐車場予定地	1,000㎡	夷王山墳墓群Ⅱ
H 7	上ノ国市街地遺跡発掘調査事業	6,410	第１次調査地点（笹浪屋敷遺跡）	個人住宅	本発掘		240㎡	笹浪屋敷遺跡
H 8	町内遺跡発掘調査事業	15,565	第２次調査地点（米沢屋敷遺跡）	個人住宅	本発掘		80㎡	原歌遺跡Ｓ地点
			第３次調査地点（久末屋敷遺跡）	個人住宅	本発掘		22㎡	原歌遺跡Ｓ地点
H 9	町内遺跡発掘調査事業	12,055	字上ノ国市街地	学術研究	確認調査	テストピット 142 ヶ所	140㎡	町内遺跡Ⅱ
H10	町内遺跡発掘調査事業	17,267	第４次調査地点（向井啓吉宅遺跡）	個人住宅	本発掘		30.5㎡	町内遺跡Ⅱ
			史跡花沢館跡周辺	学術研究	確認調査	指定地東西、後方（TP 29 ヶ所）	130㎡	町内遺跡Ⅲ
			史跡勝山館跡周辺	学術研究	確認調査	檜木沢地区	10㎡	町内遺跡Ⅲ
H11	町内遺跡発掘調査事業	16,023	史跡勝山館跡周辺	学術研究	確認調査	檜木沢・ホド長根地区	210㎡	町内遺跡Ⅲ
			第５次調査地点（森宅地点）	個人住宅	本発掘		28.3㎡	町内遺跡Ⅲ
			洲崎館跡内外	学術研究	確認調査	砂館神社北側・東側丘陵部（TP 49 ヶ所）	330㎡	町内遺跡Ⅳ
H12	町内遺跡発掘調査事業	18,580	洲崎館跡内外	学術研究	確認調査	砂館神社西側・南東側平坦部（TP 14 ヶ所）	120㎡	町内遺跡Ⅳ
			字向浜地区	学術研究	確認調査	テストピット 14 ヶ所	300㎡	町内遺跡Ⅳ
H13	町内遺跡発掘調査事業	18,342	洲崎館跡内外	学術研究	確認調査	砂館神社南東側平坦部（TP 6 ヶ所）	438㎡	町内遺跡Ⅴ
			第６次調査地点（長谷川宅地点）	個人住宅	本発掘		90㎡	町内遺跡Ⅴ
			字北村地区	学術研究	確認調査	テストピット 47 ヶ所	70㎡	町内遺跡Ⅴ
H16	町内遺跡発掘調査事業	12,149	洲崎館跡	学術研究	確認調査	指定地北側耕作地	57㎡	町内遺跡Ⅷ
			史跡花沢館跡	学術研究	確認調査	頂上平坦部、後方空壕	97㎡	町内遺跡Ⅷ
H17	町内遺跡発掘調査事業	12,019	第７次調査地点（山本宅地点）	個人住宅	本発掘		85㎡	町内遺跡Ⅸ
			史跡花沢館跡	学術研究	確認調査	正面平坦部、北側舌状張り出し平坦地、南東側空壕	260㎡	町内遺跡Ⅸ
合計		128,410						

※　平成８、12、16年度の総事業費には、それぞれ原歌遺跡（Ｓ地点）、比石館跡、ワシリ遺跡（汐吹）の分布調査にかかる事業費も含まれている。

（蝦夷地部分図）』（第22図参照）の「上ノ国ヱソ」の系譜に連なる者たち）が族的な結合を保ちつつ、渡党の末裔たる蠣崎党の一翼を担っていたとの推量もあながち荒唐無稽ではないと考える。

この館の性格については、「15世紀に和人が蝦夷島進出の拠点」、「蠣崎氏の上ノ国地方支配の拠点」などと言い表されてきたが、遺構の配置からみても防御性はきわめて強く、要塞のごとき堅固な山城といえる。しかし、主郭内部の様相は鉱山町のごとく都市的である。この館は中世国家の境界領域の真っ直中に成立した、「不定形のエネルギー(47)」を吸引する磁場のごとき「城塞都市」であったと考えられる。

第４節　旧地形の様相

時代によってさまざま様相を呈していた河口部付近の地形環境が、中世という時代における三館の立地に少なからず影響を与え、河口部に三角形で囲繞するかのごとく三館が占地する状況を生み出したものと考えられる。

以下に、三館やその周辺の景観や地形環境について、地図や文献資料の分析、考古学や自然地理学的な調査結果などから読み取ってみることにする。

１　花沢館跡

当町において字名・地番改正が行われた昭和10年当時の地籍図（第23図参照）をみると、館跡東側に同一地名と考えられる「デキ淵」、「テケ淵」、「デケ淵」という旧字名が確認できる。その範囲は天の川の現河道の北東側に向かって大きく突出し、水流の行く手を遮るかのようである。「デケ」とは方言で「でかい（大きい）」の訛音であるので、旧字名「デケ淵」は深くて淀んだ大きな川淵の存在を想起させる。児島恭子氏は、旧字名「花見館」について、「はなみ」をアイヌ語として解すれば、「パナ・モイ pana-moy 浜（川下）側の・淵」と読み解きできるとした(48)。これらのことから、昔時は突出していた城館の先端部を洗うように流れている天の川の上流側に大きく屈曲した淵地形を、その付近には船着き場も想定することができる。

また、地籍図上に上ノ国から太平山麓の小森まで天の川沿いに点状に連なった「岡道」という旧字名も確認できる。この「岡道」は上ノ国から小森へと続く丘陵を東西に縦断する古くからの陸路で、館の先端部を通っていたと推されるが、館の中まで引き入れていたとも考えられる。

これらはすでに市村高男氏が指摘しているところである(49)が、花沢館は通称「岡道」と呼ばれた陸路と、天の川河口部と内陸部を連絡する川路という２つの交通路を扼する要地を占地したとの推測も可能と考えられる。

２　洲崎館跡

１）地名としての「天河」－文献調査－

「洲崎」は、『新羅之記録』や『福山秘府』の中で「川北天河の洲崎の館」、「上國河北天河洲崎」などと表記されているので、大地名「天河」に包摂されている小地名であると考えられる。『福山秘府』は、「天河」は「西部上ノ国の地名」と明解に割注を施しているので、語序に則って解釈すれば、川北の「天河」と呼ばれる土地の一角に「洲崎の館」が築造されたことになる。

『上ノ国村史』は、「天河」について「少なくとも、てがと読むのが古い呼び方であろう。」としている。元和４年(1618)と同８年(1622)の２度に亘って、イエズス会宣教師アンジェリスが布教のため松前を訪れているが、興味深い報告と地図を残している。その報告によれば、最初に渡道した時、津軽半島西岸の小泊で乗船したが、大時化のために松前に着岸することができず、同船していた松前侯の甥の指示で蝦夷の奥にある湊に着いている。その湊は地図に書き込まれた「tçuga（ツガ）」と考えられており、地図上の位置関係から上ノ国に比定されている(50)。

その湊は、古くは「テガ」もしくは「ツガ」と呼ばれており、その語音に好字二字「天河」が宛てられ、後代には、「天河」は上ノ国と同義と解され、またその字義から川の名として使われるようになったとも推測される。

北海道から東北地方にかけてアイヌ語地名が広く分布していることはよく知られているが、「テガ」や